

人間科学研究科が目指す知と知の融合、知と社会との融合



巻頭言

八十島 安伸*

Integrating Knowledge Across Disciplines, Connecting Knowledge and Society
Initiatives of the Graduate School of Human Sciences, The University of Osaka

Key Words: Interdisciplinary research, Co-creation, Conviviality

はじめに

令和8年4月より大阪大学大学院人間科学研究科の研究科長を拝命しております八十島と申します。この小文では、当部局・人間科学研究科の歴史や変遷、そして目指す研究および社会共創・社会学連携についてご紹介したいと思います。私どもは当部局のことを人科と呼んでおりますので、これ以降は人科と呼称いたします。

人科とは

大阪大学では、他の国立大学に先駆けて、基礎工学部や人科という当時の大学からみても独創的な学部が開設されてきました。人科が創設されたのは、本邦初の万国博覧会が大阪府吹田市で開催された1970年から2年後の1972年でした。全く未知の「人間科学」という学問領域を創設するため、大阪大学文学部より複数の教員が「人間科学部」という新しい学部を設立したと聞いております。当初から、心理学と社会学、そして教育学を一つの部局に集め、「人間科学」を立ち上げるという構想であり、フランスの Sciences Humaines (人間についての科学) から影響を受けたとお聞きしています。当部局の東館に設置されたE207教室は、別名ユメヌヌホール (Humaines Hall) と呼ばれ、フランスに起源をもつ人間科学の系譜を意識しているとも聞いております。

私が担当する行動生理学講座は、2年後の1974年に開設されました。初代教授には阪大医学部第二生理学教室をご卒業後に阪大医療技術短期大学部の教授をなされていた下河内稔先生が着任されました。行動生理学講座は、人間を生物学や生理学・医学の視座からも理解する必要があるという理由から発足したとお聞きしております。

創設の頃から、行動学系には産業領域、特に、交通領域での心理学的テーマを探求する産業行動学講座や、人間の基礎的な心理を実験的に研究する行動学講座が設置されていきました。その後、社会学とのつながりが強い社会心理学講座、そして、ニホンザルを主たる研究対象として、霊長類の研究の視座からヒトを理解するための研究に取り組む比較行動論講座という研究室も初期に開設されたのです。つまり、ヒト中心の心理学・行動科学に加え、それ以外の学問領域の研究から人間理解を目指してきたことが人科における行動学系の特徴の一つとなってきました。心理学以外にも、生物学や霊長類学、統計科学を含む多様な学術領域の視座を踏まえつつ、日常生活の人間の営みから人間の本質を捉えようとする人間科学は、現在の人科の行動学系の多くの研究室にも受け継がれています。

災害を起点とした新領域の発足

設置当初から人科の研究室・講座は順調に増えていきましたが、1996年に大きな変革の起点となる講座が発足しました。1995年に発生した阪神・淡路大震災を境として、ボランティアという取り組みが社会にも広く認知されるようになってきました。その社会状況を踏まえ、人科にもボランティア行動学、ボランティア・システム学、ボランティア教育学という研究室が設置されたのです。当時、人科の助手として大学教員になったばかりの筆者には、ボ



* Yasunobu YASOSHIMA

1967年4月生まれ
大阪大学大学院 人間科学研究科博士後期
課程単位取得退学(1995年)
現在、大阪大学大学院 人間科学研究科 行
動生理学研究分野 教授
博士(人間科学)
TEL: 06-6879-8047
FAX: 06-6879-8047
E-mail: yasoshima.hus@osaka-u.ac.jp

ランディアを科学することが理解できなかったものの、それから現在の社会学連携へと至る過程を振り返ると、このアイデアの先見性には驚かされています。そして、2000年の大学院重点化を経て、人間科学専攻という大学院組織の下に大講座が設置され、各研究室は大講座に所属することとなりました。さらに、2007年における大阪大学と大阪外国語大学との統合が人科に再度の大きな変革をもたらすこととなります。大阪外国語大学に所属していらした多くの先生方を人科にお迎えし、その先生方によってグローバル人間学専攻という組織ができました。そして、人科の大学院は2専攻となったのです。それまでの人科にはなかった新たな学問領域を考究する研究室が増え、人科における学問領域の多様さが一段と増すこととなりました。

4つの学系の設置

グローバル人間学専攻の設置から約10年後の2016年には、人科の発展を図るためにグローバル人間学専攻の教員と研究室を人間科学専攻へと所属替えし、1専攻体制へと移行しました。旧グローバル人間学専攻のそれぞれの教員は、行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系という4学系の組織へと移籍し、それぞれの学系は2つの大講座からなるという体制となりました。共生学という新たな学問領域を打ち立てるアイデアは、人間科学という新領域の創造という人科設置当時の意思にも類すると言えるでしょう。行動学系の人間行動学講座にも環境行動学研究分野が新設されました。

社会との共創・社会学連携の推進

4学系が設置された2016年4月には、本研究科に附属未来共創センター¹⁾が設置されました。『社会と大学とのつなぎ目となり共に未来を創ります』という理念の下、教員や学生が社会の皆様と「つどい、つながり、つくりあう」という活動を行うことで、大学と社会の皆様がともに新しい知(共創知)を作り出すことを目指しています。現在では、人科内の異なる分野間、学内他部局間、および学外諸団体との連携プロジェクトである「オーブンプロジェクト(スタートアップ型27件、2026年現在)」によって新しい「人間科学」の創造に取り組んでいます。また、「大阪大学オムニサイト協定(OOS協定)²⁾」という共

創活動を2017年から開始し、共生社会のための産官社会学連携の場の支援・開発に取り組んできました。2026年現在では、OOS協定は26団体にまで増加し、協働のベクトルをさまざまな領域へと広げています。一例として、災害復興に関連したOOS協定を紹介します。東日本大震災の後、岩手県九戸郡野田村の復興に関わる形で、教員・学生が現地に赴き、村民の皆さんと交流を深め、その復興とともに考えてきました。野田村とOOS協定を結び、活動してきた過程で、学生が野田村の現場で学び、気づき、感じることを重視する教育実践や実習が展開されてきました。学生らと教員が大阪大学吹田キャンパスに加え、野田村でのリアリティを伴う学びや実践を積み重ねてきた結果、学生・教員・野田村村民の皆さんの3者が共に前に進むための知恵を作り合うという知の循環へと昇華してきたのです。2026年に発生した熊本地震にも学生らを派遣し、その復興支援活動に参画することを通じて、災害や地域課題に主体的に向き合い、協働して解決策を構想できる人材や、将来の日本社会の防災・レジリエンスの向上に貢献できる人材の育成を目指しています。災害復興だけではなく、例えば、安全運転・交通事故防止などの日常生活に直接かかわるようなテーマについてもOOS協定締結団体との協働を通じて、教員・学生が新しい知の創造と社会課題の解決策の作出を目指しています。

これからの人科と「人間科学」

2022年には人科は設立50周年を迎え、その歴史は50周年史³⁾にまとめられました。大阪大学の吹田キャンパスから始まった「人間科学」は、この50年の間に、全国の国公私立大学で40を超える「人間科学」を名乗る部局が設立されるまでに発展してきました。そして、「人間科学とは何か」という問いは、この半世紀の間にも、模索され続けてきました。大阪大学の人科は、前述した社会学連携をより進めつつ、それぞれの教員の専門知の深化も重視します。筆者個人は、人工知能(AI)の急速な発展は、5年・10年先の未来社会すら大きく変えると予見しています。未来社会の大きな変革が予見される中で、人科そして大阪大学には、どのような教育を行うべきか、どのような研究を進めるべきかという課題が突きつけられています。その中で、「人間とは何か」という問いが

ますます注目され、問われると考えます。「人間科学」の立場から、個々の専門知を深化させ、先鋭化しながら、学術領域や社会のそれぞれに貢献し、共に幸福に生きていくための知を生み出していくことが、人科の大きな課題・ミッションであり続けるでしょう。そのための教員や学生が人科につどい、つながり、協働してくださることを願ってやみません。

参考文献

- 1) <https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/>
- 2) <https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/omnisite/>
- 3) 大阪大学人間科学部50年史(2023)、大阪大学出版会、大阪大学人間科学部・人間科学研究科創立50周年記念事業委員会

